

紙幣減價論

——價格の度量標準についての覺書——

三宅義夫

つぎに、「紙幣減價ひいてはインフレの際」「價格標準はなんら變更されない」、それどころでなく、「紙幣減價は價格標準を従前通り不變としてこそ可能である」と考えられる遊部氏の見解を検討しよう。

まず、一體これはどういうことをいつておられるのであろうか。氏の著『インフレーションの基礎理論』においてこのことについてまずぶつかるのは、悪鑄とインフレーションとの區別を論じておられるような箇所である。

「一體惡鑄によつて物價が騰貴するのはこの場合に價格標準の切下が行われるからである。……この場合物價騰貴は「貨幣數量が増大する」ことの「原因であつて結果ではない。……惡鑄とインフレとは別箇の現象である。蓋し惡鑄によつて物價が騰貴するの、は基本的には價格標準の切下によるものだが、更にこれを實現させるものは流通手段の流通量とその必要量と一致するからであるのに、インフレによつて物價が騰貴するのは紙幣の流通量がその必要量を超過して膨脹したからである」(八一—九頁、傍點および「」内—三宅)。

惡鑄についてはのちに述べるが、そしてそのさいにこの箇所は詳細に吟味されることとなるであろうが、さしあたりここでは、右の文章によつて、氏の考え方のつぎのような點が注意される。すなわち、惡鑄の場合には「價格標準の切下が行われる」が、インフレーションの場合には行われぬ、惡鑄とインフレーションとを區別するもつとも重要な點はここに存する、ということ。したがつて氏にとつては、インフレーションの場合に價格の度量標準が「切下」げられると見るならば、惡鑄との區別を認識しえないことになつてしまふのではあつて、この點からも「不變」が力説されねばならぬ、ということである。

これだけのことをもつてしても、氏の價格の度量標準固定不變説が、かんたんな思い違いではなく、いかに抜き難く根を擡げているかを覗うことができるが、つづいてつぎのような叙述がなされている。

「なお惡鑄とインフレーションの根據は、インフレの場合に價格標準切下と同一の結果が生ずるということかも知れぬが、しかし兩者は本質的に別箇の現象である。マルクスは紙幣減價による物價騰貴について、「その効果は、あたかも金が價格の尺度としてのその機能において變更された場合と同じである。」と述べているが、もちろん兩者を同一視などしていない。いな兩者が異なるからこそその結果に關する比較がなされているのである」(九頁、傍點—三宅)。

まずここから分ることは、遊部氏は、「同一の結果が生ずる」が「兩者」すなわち「インフレ」と「價格標準切下」とは「本質的に別箇の現象である」という氏の提言が、氏の引用している『資本論』のこの説明となら矛盾するものではなく、かえつてこの説明は兩者が「異なる」ということを裏付けけるものであるとされていることである。

このことからつぎのようなことが斷定されうるであらう。すなわち、氏がインフレーションのさい「價格標準はなら變更されぬ」と主張されるに當つて、變更されない、變更されたとしておられるのは、『資本論』のこの箇所

で「金が價格の尺度としてのその機能において變更された」といつてゐるのとまったく同じ意味においてである、ということである。いいかえれば、氏にとつては、インフレーションのさい價格の度量標準が變更されるとするならばそれはここで「金が價格の尺度としてのその機能において變更された」といつてゐるのとまったく同じ意味において變更されることであると解されてゐる、ということである。もしそうでなければ、ここで『資本論』の右の文を引き合いに出すことはおよそ無意味なことであるし、「いな兩者が異なるからこそその結果に關する比較がなされてゐるのである」というようなことを主張することができないはずはないであらう。ところで、インフレーションのさい價格の度量標準が引下げられるということが右と同じ意味においてではない、ということになるならば、このことがきわめて妙なことになるであらうことは明かである。この點が一つ。

とすると、氏が「價格標準はなんら變更されない」と主張されるのは、法定的な變更がないという意味であつて、事實上の變更とそれとを區別して、そういう意味で「變更されない」といつておられるのではなからうか、という疑念が當然出てくるであらう。しかしこれについては氏は斷乎としてつぎのようにいわれてゐるのである。

「……同一の効果がみられるのである。しかし、さればといつて、このとき價格標準が切下げられた——「事實上」にせよ、ここで氏は註を入れて曰く、「マルクスの記述にはこの點に關する謬想を生ぜしめるような稍々不明瞭な箇所がある。だがその眞意は私見の如くであらう」と——とみるのは、紙幣減價と價格標準切下との本質的差異を混同視するものである」(四〇頁、傍點および「」内—三宅)。

「インフレの場合には法制上はもとより事實上の價格標準の切下など起きはしないのである。いな價格標準は依然固定不變であればこそインフレという物價の名目的騰貴が生ずるのである」(七五頁、傍點—三宅)。

もとに戻つて、さきの氏の文章でつぎに注意をひくことは、「同一の結果が生ずる」ということであつて——これは肯定的に述べられている——、そしてそれは物價騰貴についてであると解されているようである。この點について氏の見解をさらに確めておこう。

「インフレ正しくは紙幣減價による物價騰貴が名目的であるということ……。これ蓋し紙幣減價による物價騰貴は價格標準の切下の場合と同一の事態であるとみらるる所以である」(一一頁、傍點—三宅)。

「この引用文『前掲『資本論』からの引用文と同様な説明をしている『批判』の箇所』の真意は紙幣減價の際の物價の騰貴が價格標準の切下による物價の騰貴と本質的に同一の事態だというにある。蓋し兩者とも價值關係の變動に基かぬ純粹に名目的な物價の騰貴であるから。……たゞ紙幣減價の効果(結果)としての物價騰貴があたかも價格標準切下によると同様の事態であるにとゞまる」(六八頁、傍點—三宅)。

かくて、つぎのように斷定して差支えないであろう。すなわち氏によれば、インフレ乃至紙幣減價による物價騰貴と「價格標準切下」による物價騰貴とが「同一の事態」であるのであり、そして『資本論』もまたここでそういうことをいつてゐると解さるべきである、ということ。

このような「同一の結果」、「同一の事態」を生ずるが、「しかし兩者は本質的に別個の現象である」、いな、つぎのごとく「二律背反」であるとされる。

「紙幣減價は價格標準を從前通り不變としてこそ可能である。蓋しもしも紙幣膨脹と同時に同じ割合だけ價格標準が切下げられるならば紙幣流通量は常に必要量をあらわすこととなり兩者の乖離を基礎とする紙幣減價は存しないから。したがつて紙幣減價と價格標準切下とは二律背反の關係にあり、兩者がしかも同じ割合でなど同時に起ることはない」(六八頁、傍點—三宅)。

以上で大體氏のいわれていることが呑込めることとなつたであらう。したがつて、もはやこの邊で檢討に入つてよ

いかと思われる。まず右に掲げた『資本論』の説明を、その前後とともに見ることはじめよう。

「もし紙券の數量が、たとえば一オンスづつの金の代りに二オンスづつの金を表示するならば、事實的には、たとえば一ポンドは、ほぼ四分の一オンスの金の代りにほぼ八分の一オンスの金の貨幣名となる。その効果は、あたかも金が價格の尺度としてのその機能において變更された場合と同じである。(Die Wirkung ist dieselbe, als wäre das Gold in seiner Funktion als Maß der Preise verändert worden.)」かくして、以前には一ポンドの價格で表現された同じ諸價值が、いまや二ポンドの價格で表現される」(第一卷、一三三頁、頁數はすべてインステイトウト版のそれ、『批判』についても同じ)。

これが、「眞意」は「私見」のごとくであつたろうが、「稍々不明瞭な」記述をしていると、遊部氏によつて評價されている記述の一つである。かかるいま一つは『批判』の當該箇所であつて、こちらの方は遊部氏にとつては一層不明瞭であるらしく、これは「稍々別箇の解釋を許すかの如くであるが、眞意は右の「資本論」からの引用文の示す如くであろう」(六八頁)と評價されている。右の『資本論』の箇所と同様に周知の箇所である。

「もし千四百萬ポンドが商品流通のために必要な金の總額であつて、國家が各々一ポンドの名稱をもつ二億一千萬の紙券を流通に投じるならば、この二億一千萬の紙券は千四百萬ポンドの金の代表者に轉化させられるであろう。これはあたかも、國家がポンド券を金の十五分の一の價值しかもたない金屬の代表者にしたのと『資本論』のさいと、同じに譯せば、「代表者にした場合と」、あるいは、以前の十五分の一の重量の金の代表者にしたのと、同じであろう。(Es wäre dasselbe, als hätte der Staat die Pfd. St.-Zettel zu Repräsentanten eines 15 mal minder wertvollen Metalls oder eines 15 mal kleinern Gewichtels Goldes als zuvor gemacht.)」變動したものは、價格の度量標準の命名だけであろう。價格の度量標準の命名はもろゝん慣習的なものであつて、それが造幣純分の変動によつて直接に行われようと、紙券の數があらたなより低い度量標準にとつて必要なだけ増加することによつて間接に行われようと、どちらにしてもこの場合同じことである。ポンドという名稱はいまや以

前の十五分の一の金量を指示しているのだから、すべての商品價格は十五倍に騰貴し、そして以前千四百萬のポンド券が必要であつたのとまったく同じように、いまや實際、二億一千萬のポンド券が必要であらう」(『批判』一一二頁)。

見られるように、ドイツ文を併せて掲げた箇所は、同じことをやや形を変えて述べているだけであつて、いずれも、一ポンドが以前の半分の金量の貨幣名となること(『資本論』)、一ポンド券が以前の十五分の一の金量しか代表しえなくなること(『批判』)について、そういうようになることは、あたかも、金が價格の尺度としての機能において變更されたのと(『資本論』)、または、國家がポンド券を金の十五分の一の價值しかもたない金屬の代表者にしたのと、あるいは、國家がポンド券を以前の十五分の一の金量の代表者にしたのと(『批判』)、同じであると述べているのである。

この説明についてはのちにふたたび見るが、ここでさしあたり必要なことだけ述べれば、金が價格の尺度としての機能において變更されたというのは、『批判』の方で國家がポンド券を以前の何分の一かの金量の代表者にしたと述べているように、價格の度量標準の法定的變更である。ところですでに前稿で見たように、もっぱら不換紙幣が流通している下においては——この場合がそうであるが——、このポンドという名稱は國家がこれを貨幣名としているのであるが、金何グラムをポンドと呼ぶかについてはなら規定しているわけではない。したがつて、このポンドのいい表わす金量の減少、ポンド券が代表する金量の減少は、金量についての法定的變更によるものであるはずはもちろんない。それにもかかわらず同じであるといっているのはなぜか。要するにそれは、ポンドという貨幣名のいい表わす金量が、ポンド券の代表する金量が、減少するということは、金量の減少、とかぎりにおいて、國家が價格の度量標準を引下げたのと同じであるといっているのである。それ以上のことをいっているのでも、それ以下のことを

してゐるのでもなく。

すなわちここでいふこと、それ自身は、遊部氏がいわれるようにインフレ乃至紙幣減價による物價騰貴と「價格標準切下」による物價騰貴とが「同一の事態」であるといふことをいふのではない。そういう「眞意」ではないのである。ここで問題としてゐるのは、ポンドという貨幣名のいい表わす金量、ポンド券の代表する金量、それの減少以外のことではない。「比較」はその點についてなされてゐるのであつて、べつに物價騰貴についてなされてゐるわけではない。すなわち物價騰貴が同一であるという「結果に關する比較」がなされてゐるわけではない。

ところで、紙幣の代表金量の減少が金量の減少というかぎりにおいて價格の度量標準の法定的引下げと同じであるといふことは、いいかえれば、價格の度量標準が、國家によつてではなく、法的にではなく、つまり事實的に、引下げられたといふことにほかならないのである。さきに見たように、遊部氏は、インフレーションのさい「價格標準はなんら變更されない」と主張されるに當つて、變更されるとするならばとりもなおさず「價格標準切下」であり、これと「異なる」のでないから、「比較」がなされるはずがないという言葉づかいの論理を示されたが、「比較」は法定の引下げとなされてゐるのであつて、インフレーションのさい價格の度量標準が引下げられるというのは法定的引下げの意味ではもちろんないのである。氏は非常に力まれて突進されたが、見當がちがつてゐるのである。

なお、紙幣増發によつてポンドという貨幣名のいい表わす金量が半減したさい、諸商品の價格が、抽象的にいへば二倍となることは、價格の度量標準が法定的に半分引下げられたさいと同様である。——これについてはさらに後述のところを見られたい。しかしてそれは、同じ貨幣名のいい表わす金量の減少、すなわちそのかぎりにおいて價格の度量標準の法定的變更と同じである事實上の變更、に基いて生じることであるのである。かかることを抜きにしま

たは否定して、物價騰貴を、またその同一を、云々することはできない。つまり『資本論』『批判』では、遊部氏が主張しておられるようなことを述べているのではないばかりでなく、遊部氏が否定しておられることが、述べられているわけである。

氏は氏の所説が古典において裏付けられているとされ、その上、「謬想を生ぜしめるような不明瞭な」「記述」であると誣い、「私見」を押しつけて「眞意」とされるというような歪曲した解釋を示されているが、古典は以上見たようにきわめて正確に書かれているのである。

インフレーションのさい價格の度量標準が引下げられるのは事實的に引下げられるのであつて、法定的に引下げられるのではない。この事實的にと法定的にとの區別は、はつきりと認識されなければならない。ここにインフレーション特有の諸事情が発生するのであり、ここにインフレーションを理解する鍵の一つがある。ところが遊部氏が、從來通常見受けられるようにこの區別を十分に理解しておられないというにとどまらず、積極的におよその區別を認めない、というより理解しえないでおられるのは、どうしたわけであらうか。氏の著書中のいろいろの説明を見ると、その理由はしごくかんたんであつて、氏が價格の度量標準について、實のところはなにも知っておられなかつたためなのである。

(註) なにも知っておられない、といっただけではいかにそうであるか分らないので、左に若干、氏の説明振りを掲げておこう。「先ず起る疑問は價格標準の切下を法律的と經濟的との二様に解することである。なるほど規定としての純金二分を以て圓と稱すは貨幣法第二條にみられる如き法律上の規定ではあるが、それは單なる法律上の規定にとゞまるものではない。價格の單

位圖が一貫でもなく一処でもなく二分に關係するという規定の内容は法律的規定以上のもの、即ち經濟的内容である。そこには法律的に如何ともなしがたい經濟的必然性がある。價格標準制定の形式は法律的體裁をとりこそするが、制度としての價格標準それ自身、その内容及びその持續は全く經濟的なものである」(六四—五頁)。これはまったく、猪俣氏が「價格標準の變動なるものは、法律的にも生じ得るし、經濟的にも生じ得る」といつておられることについて、「法律的」と「經濟的」という言葉をとらえて、法律の規定が經濟的内容と無關係ではないということを述べておられるうちに、みずからわけが分らなくなつてしまつたものであるといふほかない。

「價格標準をなにか簡單に可動的のものと考えるのは、計算貨幣としての貨幣の機能について無理解なるためである。……價值尺度としての貨幣の機能は可能的である。……しかるに計算貨幣としての貨幣の機能は固定不變である。……しかるに計算貨幣の機能——價格標準が可動的であるかの如き感を我々がいだくのは、一つには商品としての金の市場價格……が變動するから、そしてこれには紙幣流通の場合流通手段の減價が反映されるから、これにともなつてきながら價格標準も又事實上變動するかの如き錯覺をいだかされるのである。けれども市場價格をおびる金は現實の商品としての金であつて貨幣商品としての金ではない。「貨幣は何らの價格も有たない。」「資本論」……しかるに價格標準を紙幣減價(インフレ)すれば……これに應じて變動するかのようを考えるのは、とどのつまり計算貨幣と價值尺度との混同視に由るものである」(七五—七七頁)。ついで氏は、「價值の尺度としての金と價格の度量標準としての金とは、全然相異なる形態規定をもつており、そしてその一方と他方との混同は、もつとも愚劣なる諸學說を發生せしめた」という『批判』の一句(『批判』五八頁)を引かれ、猪俣氏の論は「かゝる「愚劣なる諸學說」の「代表である」ときめつけられる(七七頁)。そして最後にこのように、「計算貨幣、價格標準について稍々詳論したのは、價格の度量標準固定不變説をとる「私の紙幣減價の例解の正しきをこれによつて論證するためである」(同上)と自畫自讃される。遊部氏は、「金が價值尺度であるのは、その價值が可變的だからであり、價格の度量標準であるのは、それが不變の重量單位として固定されるからである。この場合には、同じ名稱の大きな度量規定のすべての場合と同じように、度量諸

關係の固定性と確定性が決定的となる」「批判」(五八—九頁)ということや、「まったく同じ分量の金が度量單位として不變的に役立てば役立つほど、價格の度量標準はそれだけよくその機能を果すことになる」(『資本論』、第一卷、一〇三頁)というようなことについて、まったく誤って解しておられるわけである。それに加うるに、金の鑄貨價格について、したがってまた金の市場價格について、またおよそ貨幣商品金なるものについて、いぶかしいほどでたらめな理解をされているわけである。

またつぎのようにも説明しておられる。「インフレの場合の紙幣の減價は流通手段としての減價であつて計算貨幣としての減價ではなく。だういふ計算貨幣は「減價」するはずがない」(七四頁)。またいわれる、「價格標準は一度制定されたならば便宜的「慣習的」なものと化し惡鑄や平價切下の行われぬかぎり不變である。……單なる惡鑄にせよ平價切下に基く改鑄にせよ、これに基く價格標準の變更は、……本來固定的なもので事足りる價格標準がいわば外から變更を餘儀なくされるのである」(七五—七七頁)。

これらの諸文章が誤りによつてのみ充滿されたものであるということ、しかもなお相手の所説を「愚劣」ときめつけ自説の「正しさ」を揚言されるということは、氏の他のすべての文章と共通しているが、ここではもはや、その誤りを検討することがなんらかの生産性をもつ、というようなものを見出しえない。註として説明振りを掲げるとどめた所以である。

なお二つの問題を扱つておこう。

一つは、「價格標準はなんら變更されない」ということは右で片附いたとして、「紙幣減價は價格標準を従前通り不變としてこそ可能である」という點がまだ残っているので、これについて。いかなる理由からかかる結論がでべきたかについて氏が興えておられる説明は前掲のつぎの説明である。

「蓋しもしも紙幣膨脹と同時に同じ割合だけ價格標準が切下げられるならば紙幣流通量は常に必要量をあらわすこととなり兩者の乖離を基礎とする紙幣減價は存しないから」(前出、傍點は原文のまま)。

この意味はこういうことであろう。すなわち、流通必要量をこえて紙幣が二倍に膨脹すると、膨脹しても流通必要量しか代表しえないから、各紙幣の代表する量は半分に減少する、この場合もし、各紙幣の代表する量の半減をもつて價格の度量標準が事實上半分に引下げられたことであるというならば、この引下げられた價格の度量標準をもつていい表わされた流通必要量は、以前の價格の度量標準をもつていい表わされた流通必要量と一致して一〇億圓であるとする、二倍の二〇億圓ということとなり、とすれば、紙幣流通量は流通必要量と一致していることになるではないか、しかるに紙幣減價は流通必要量と紙幣流通量との乖離を基礎とする、したがって紙幣減價は存しないことになるではないか、ということをしておられるのである。乖離が存在するためには、したがって紙幣減價が可能であるためには、遊部氏のように價格の度量標準は以前のまま固定不變であり、流通必要量は一〇億圓と解されなければならぬではないか、といわれるわけである。氏の得意や思うべし。だがこの手品師めいた論理は最初から尻尾を出しているのであつて、右の冒頭の、流通必要量をこえて紙幣が二倍に膨脹すると、ということのなかに、乖離を見出しえなかつたのは氏の千慮の一失であつたのである（註）。

なおついでにいえば、流通必要量と紙幣流通量とが「常に」乖離していなければならぬとする氏にあっては、つまり「紙幣の必要量」はどこまで行つても不變とする氏にあっては、二倍に膨脹した紙幣流通量は流通にとつて必要量となる、という重要なことがまつたく氣付かれもされず、また理解もされえないことになる。膨脹した紙幣は流通にとつて過剰となるのではなく、必要となることは、廣く往々にして看過されているが、インフレーションを把握する場合忘れられてはならないことなのである。さきに長文引用した『批判』の叙述の終りのところ、「以前千四百萬のポンド券が必要であつたのとまつたく同じように、いまや實際、二億一千萬のポンド券が必要であろう」

（傍點—三宅）を見られた。

（註）氏にあっては、流通貨幣（金）量にかんする式をもって商品價值總額の價值通りの實現のための「流通手段一般」の「必要量」を示すものと解し、貨幣（金）流通の場合においては、それと貨幣（金）の流通量との乖離を云々して、貨幣、金の減價を説かれるのであるが、それと同様に、もっぱら不換紙幣のみが流通している場合においても、右の式を右のように曲解された意味に解し、すなわちこの場合は右邊をだちに紙幣の、しかも價值通り實現のための「必要量」と解し、それと紙幣の流通量との乖離を云々して、紙幣の減價を説かれるのである。したがって、氏にあっては、「乖離」は流通必要量と流通紙幣量との間にはなく、紙幣の右のごとき「必要量」と紙幣の「流通量」との間に存すると解されているのであって、右引用文における「必要量」という語もかかる幾重にも誤解されたところの「必要量」なのであるが、ここではこの點に觸れないでも済まらうるので、あまりの煩わしさを避けて、「必要量」を流通必要量、つまりもし紙幣が流通しなければ流通したであらうところの金量の意に訂正して解しておいた。

しかし氏はかく誤解しえたことをはなはだ得意とされ、「嚴密に「！」私の解する必要金量という意味においてであることがこゝであらためて注意されねばならぬ」（八六頁）とか、猪俣氏にたいして、「一步すゝんで實現さるべき價格總額を更に價值量としてとらえる努力「！」においては缺けてゐる」（六三頁）、「これは二見迂遠なことのように感ぜられるが、こゝまで遡及してはじめて必要金量は正しく「！」把握されるのである」（同上）とか、「氏「猪俣氏」の紙幣必要量の見方が表面的であつて價值關係にまで降下してゐない」（八二頁）とか、いわれているのである。遊部氏のかかる誤解によつていかなる結果が生み出されるか、氏がこの誤謬を基礎としていかに多くの誤謬を積み重ねることをほしきままにされてゐるか——したがって、氏はますます得意となられる——については、拙稿「金・銀行券・紙幣にかんする若干の問題」（『經濟評論』、昭和二十五年一月號）參照。猪俣氏が遊部氏と隔たること「一步」であることは、のちに「爲替インフレーション」論検討のさい問題とせざるをえないかと思われる。

つぎは、價格の度量標準を固定不變としていかにして遊部氏は「紙幣減價の際の物價の騰貴」を説明しておられるか、という點について。氏はつぎのようにいわれる。

「私見によればこの場合價格標準はなんら變更されない。商品價值總額「ここを價格でなく價值とされていることについては前註を見られたい」一千億労働時間—一〇萬貫の金量が五億圓でなくして一〇億圓という價格を賦與されるのは、純金二分が一圓と呼ばれず、一分を以て一圓と稱するに至つたためではなくして（もしそうならば價格標準の切下である）」「氏が價格の度量標準の引下げを法定的引下げとしか解しえておられないこと、しかもインフレーションのさい價格の度量標準が引下げられるというのは法定的引下げの意味ではないこと、またそもそも、もっぱら不換紙幣が流通する下では金何グラムを圓と呼ぶかについては規定されえないこと、これらについてはすでに見たとおりである」、一圓紙幣がもはや二分の金の價值を代表し得ず、一分の金の價值しか代表し得なくなつたために、「一圓紙幣が一分の金量しか代表しえなくなつた、ということがとりもなおさず價格の度量標準が事實上引下げられたということなのである（註二）」本來ならば購買手段としての一圓の紙幣をもつて實現されうるところの金二分と等しい價值ある商品が一圓紙幣二枚と交換されるに至り該商品の價格は一圓なるべきものが二圓に名目的に騰貴せざるを得なくなつたまでである」（三九頁、傍點および「」内—三宅）。

ここまでのところでは、氏は、價格の度量標準が事實上引下げられたということを否定されつつ、その實、曲りなりにも、價格の度量標準が事實上引下げられたということをもつて、「紙幣減價の際の物價の騰貴」の理由であると説明されているわけである。ところで氏は、この價格の度量標準の事實上の引下げを否定して、さきに掲げたように「流通手段としての減價」であるとされるのであるが、この流通手段としての減價と價格の度量標準の固定不變と、「紙幣減價の際の物價の騰貴」との結びつけについての氏の説明は右につづいてつぎのようになされている。

「紙幣の場合には……流通手段としての貨幣の機能と價格の本位「價格の度量標準」としての貨幣の機能との間の矛盾は商品

價格の名目的騰貴によつてのみ強力的に解決されてゆく。即ちこの場合存するのは價格標準切下ではなくしてかゝる貨幣の兩機能の間の、しかも一方は紙片により他方は金（觀念的定在としての）によつていとなまれるが故に存するところの貨幣それ自體としては、解決しようのない矛盾の「遊部氏註」、商品價格の本來あるべき位置以上えの上騰による外からの統一である。いわば商品價格の名目的騰貴はかくの如き矛盾の、紙幣減價の、確認にほかならぬ。だから云うではないか。この場合「物價の騰貴は、價值章標がその代りに流通しようとする主張している金量と價值章標とを強制的に等置するところの、流通過程の反作用に外ならぬ。」（『批判』、一二三頁）と（三九—四〇頁、傍點および「」内—三宅）。

「遊部氏註」——「かゝる乖離が、即ち貨幣の流通手段としての機能と價格尺度（價格の度量標準）としての機能との矛盾が、自然的及び人工的磨滅によつて金貨に生じた場合には、部分的には廢貨の法律規定により結局は貨幣改鑄によりそれは止揚される」（同上）。

氏は、一圓紙幣が一分の金量しか代表しえなくなつたことをもつて、「流通手段としての減價」であつて價格の度量標準にはなんら變更がないとされ、ここに「流通手段としての貨幣の機能と價格の度量標準としての貨幣の機能との間の矛盾」が生じるとされる。だがまちがえてはいけない。金貨幣の流通手段としての機能を代理する價值章標の分量とこの金貨幣の分量との對立、前者が後者をこえることによつて生じる「矛盾」を、「流通手段としての貨幣の機能と價格の度量標準としての貨幣の機能との間の矛盾」と呼ぶならば、この「矛盾」は各個の價值章標が代表する金量の減少——價格の度量標準の事實上の引下げ——によつて「解決」されるのである（註二）。氏はまさに、「解決」されたところに「矛盾」を發見される！ あとはこの發見された「矛盾」をいかに「解決」するかによつて、すでに果されている「解決」をなんとかして否定することが氏の仕事である。すなわち、「一方は紙片により他方は金によつていとなまれる」というように、「紙片」が金鑄貨の代理物であることを無視して價格尺度機能と流通手段機能と

を機械的に切り離され、これによつて右の「矛盾」を「貨幣それ自體としては解決しようのない矛盾」なるものにつくり上げられる。かくて救い手は外から呼び込まれざるをえない、「外からの統一」！そしてそれが商品價格の目的騰貴にほかならぬ、これによつてのみ強力的に「解決」されるのだと。つまり最後に、商品價格と貨幣とを切り離すことによつて、とどめをさしておられるのである。たしかにかかる手の込んだ念入りの誤りを案出されることは、「凡百の經濟學者」(三八頁)の及ぶところではないであらう。

なお附言すれば、さきに掲げたように氏は、金鑄貨における右のごとき矛盾が「金貨に生じた場合は」、廢貨の規定や改鑄によつて止揚されるといわれているが、そのさい、これらは一時的な解決であつて、この過程はたえず反覆されることになるということが忘れられてはならない。いわばこの場合こそ、いいうべくんば金鑄貨「それ自體としては解決しようのない矛盾」なのである。そして、そういう矛盾であるために、ここから、流通手段としての機能を金鑄貨の代理物、——補助鑄貨、價值章標によつて代理せしめるということが生じるのである。なおまた遊部氏は、矛盾が「廢減によつて金貨に生じた場合」のほか、「金貨といえどもそれが必要量以上に流通する〔！〕ならば」という「場合」を擧げておられるのであつて(三九頁)、このさいには紙幣と同様なことが經過的に起るとされ、この問題についても、誤りならざることはいわぬという氏の「方法論」を徹底的に貫いておられるのである。(この最後の點については前記拙稿参照)。

「價格標準としての金と、一般的等價物としての金との間の矛盾」というような、一見大へんむすかしそうな言葉、を云々して、自他ともに頼晦し去ることは、かつて猪俣津南雄氏の愛好されたところであつた(註三)。いままた遊部氏によつてこの點同巧異曲が試みられているわけである。「鑄貨としての金と價格の度量標準としての金との間の矛

盾」「鑄貨としての金と一般的等價物としての金との間の矛盾」(『批判』、一〇二頁)、「流通手段としての金は、價格の度量標準としての金から背離し、したがってまた、諸商品の價格を實現させるところの諸商品の現實の等價たることをやめる」(『資本論』、一三二頁)ということそれ自體については、『批判』、『資本論』の當該箇所を見られたい。

なお、遊部氏は、「紙幣減價の際の物價の騰貴」についての氏のごとき説明こそまさに『批判』の著者の意と合致するものとされているのであるが、氏の引用される『批判』の箇所ではなにがいわれているのか。その前はこうである、「價值章標の總額が増加すると同じ度合で、各個の章標が代表する金の分量は減少するであろう」。ついで前掲の文章がくる。これは、流通過程に投ぜられた價值章標は、流通過程がこれを流通必要量に強力的に等置するということが、物價騰貴はかかる流通過程の反作用にほかならないということ、を述べているものである。價值章標を流通必要量に強力的に等置するということは、各個の章標の代表する量をそこまで壓縮するということが、つまり、たとえば一圓紙幣を一分の量しか代表しえないものとするということである。流通過程によつてこれは強力的になしとげられる。物價騰貴はかかる流通過程の、價值章標の過剰投入にたいする、反作用だといっているのである。「だから云うではないか」とされても、べつに氏の説を支持しているところは、もちろんどこにもないのである。

(註一) 一圓紙幣が金二分ではなく金一分しか代表しえなくなつた、ということからなびとの眼にもまず明かなことは、金二分が一圓という價格の度量標準にかんする從來の規定が實際に行われなくなつていくということである。というのは、もしそうでなければ、圓というのは金二分の貨幣名であるから、一圓は金二分以外をいい表わしうるはずがない、いいかえれば一圓紙幣は金二分以外を代表しうるはずはないからである。この一事をもつても氏の價格の度量標準固定不變説は手輕るに覆すことができるのであるが、本稿はただに遊部氏の所説を覆すことを企圖したものではないので、錯雜した氏の敘述のなかに論理的

脈絡を探索して、なぜかかる誤った所説がでてきたかをできるだけたずねているわけである。

(註二) しかしこの解決も、それですべてが解決されつくしたことを意味するものでもちろんない。紙幣増發があまりはげしくなり、したがって減價テンポがあまりはげしくなると、紙幣は貨幣の代理物として十分に役立ちえなくなってくる、これである。

(註三) たとえば猪俣氏のつぎの説明の仕方を見られたい。「……圓紙幣が二〇%減價して一分六厘の金の代理物に過ぎなくなれば、貨幣は、先づ流通手段機能において減價したことになる。紙券によつて代理されるところの金と、一般的等價物としての金との間に生じたこの矛盾、「一」は、一方では金に對する打歩となつて現はれ、他方では商品價格一般の二五%の騰貴となつて現はれる。そしてそれと共にまた、價格の標準としての金量は、法律上は不變でも、經濟的にはすでに切下げられ、一分六厘の金量に過ないものとなる。従つて矛盾は、價格標準としての金と、一般的等價物としての金との間の矛盾、「一」にまで發展する。「一」(『貨幣・信用・及インフレーションの理論』、二八三頁、傍點および「一」内—三宅)。氏はかかる「矛盾」を「爲替インフレーション」を説くさいに合い間合い間の懸け聲のように縦横に驅使されているのであるが、それはのちほど改めてとくと拜見し、検討することとなるであらう。なお、遊部氏の著書は猪俣氏批判に主要力點を置かれているが、右の猪俣氏の文章からもそのごく一斑が視われるように、遊部氏の獨特の歪曲のなかには、猪俣氏の著書の不正確さ乃至誤謬を受けつがれ、その上に立つてこれを擴大して質的變化をとりしめられたというようものが多い。氏はそももつて、猪俣氏の所説を「愚劣」ときめつけておられるが、かかる方向への理論的「前進」は誤謬の手がこむだけであつて、泥沼にますますはまり込むこと以外のなにものをも意味しないであらう。

二

ここでさきにドイツ文を掲げておいた『資本論』第一卷一三三頁の箇所および『批判』一一二頁の箇所について、それらはいかに解さるべきかをすこし補足しておこう。

まず、『資本論』の敘述の方で用いられている「價格の尺度」(Maß der Preise) という語について。氣付かれるように、この語はこの著者によって普通用いられていない語であつて、『資本論』ではおそらくここ一箇所だけである(註)。意味は、價格の尺度であつて、したがつて價格の度量標準と同義である。貨幣の度量標準(Geldmaßstab)をしれば貨幣の尺度(Geldmaß)とつてゐるのと同様である。エンゲルスは『資本論綱要』(sogen. Konspikides I. Bandes)におつて、この箇所をつぎのように述べてゐる。

「かくて、紙幣量が吸収された金量の二倍であるとすれば、各紙幣片は低落して額面價值の半分になる。あたかも金が價格の尺度としての機能において、即ちその價值において、變化したかの如くである」(改造社版『マル・エン全集』、補卷の一、一六頁の向坂氏の譯文による、傍點—三宅)。

この傍點を附した部分の「即ち」は、原文未見なのでなんともいえないがおそらく、d. h. ではなく oder であろう。そしてこの oder は「すなわち」と譯すべき oder ではなく、「または」と譯すべきと思われる。けれど、もし「即ち」であるならば、「價格の尺度」という語は「價值の尺度」と同義ということにならねばならないからである。

(註)『批判』の方ではつぎのように用いられている。「たとえば、一八四五年のサー・ロバート・ピールの銀行條例以前のスコットランドでは、一オンスの金、しかもイングランドの計算度量標準としての三ポンド十七シリング十ペンス二分の一で表現されて、法定の價格の尺度として役立っていたけれども、實際には一オンスの金も流通していなかった。またたとえば、シベリアと支那との間の商品交換においては、取引は事實上たんなる物々交換にすぎないのに、銀が價格の尺度として役立って

いる」(六一頁、磅點—三宅)。このシベリアと支那との國境貿易については、なお『批判』一四五頁参照。そこでは、「銀はただ價值尺度であるにすぎない」と。いずれにしても銀はただ計算貨幣として用いられており流通してはいないというわけである。

つぎに、『批判』の方——「これはあたかも、國家がポンド券を金の十五分の一の價值しかもたない金屬の代表者にしたのと、あるいは、以前の十五分の一の重量の金の代表者にしたのと、同じであろう」——。この十五分の一というのは例解の千四百萬と二億一千萬という關係から出てくる數字であるが、また當時の金銀の比價一五對一に當るものであつて、したがつて「國家がポンド券を金の十五分の一の價值しかもたない金屬の代表者にしたのと同じであろう」というのは、實際には、國家がポンド券を銀の代表者にしたのと同じというわけである。いずれにしてもこれは、國家が價值尺度として機能する商品を経金からより價值の小さい金屬、たとえば銀に變えたということ、つまり價值尺度の變更である。つぎの、「國家が以前の十五分の一の重量の金の代表者にしたのと同じであろう」というのは、いうまでもなく、價格の度量標準の法定の變更であつて、『資本論』の方の叙述と同じである。

すなわち、あたかも、價格の度量標準が法定的に變更されたのと、あるいは、國家が價值尺度を變更したのと、同じであると述べているのである。これにエンゲルスの説明を加えれば、さらに金の價值が變化したのとも同じであるということになる。ところで、これらは、いうまでもなく、それぞれ相異なる事柄である。價格の度量標準の法定の變更というのは、ある確定された金屬重量の變更であり、これには金の價值はなんら關係がない。金の價值が變化すれば、諸商品の價值は以前と異つた諸分量の金で表現されるが、この表象された金の諸分量を何グラムという確定された金の分量で度量するということのなかには、金の價值という問題はなんら出て來ようがない。また、價值尺度として機能する商品の金から銀への變更は、金から價值尺度機能をも、奪うこと

であつて、これが價值尺度として機能する金の、價值の變化とことなることはないまでもない。

このように三つの事柄は相異なるが、これらとあたかも同じであるとされているのは、これらがある點においてたがいに同一であるからであり、またそのかぎりにおいてあたかも同じであるとされているのである。價格の度量標準の法定の變更は、一ポンドを以前のたとえばその半分の量の貨幣名とすることであるが、一ポンドのいい表わす量の半減は、他の事情が同じであれば、一ポンドの表わす價值の大きさの半減を意味する。また金價值が半減したさいも、一ポンドの表わす價值の大きさが半減する。價值尺度として機能する商品が金から、金にたいして半分の價值の金屬に變更したさいも、以前の quantity と同じ重量のこの金屬量がポンドと呼ばれるかぎり、一ポンドの表わす價值の大きさは半減する。つまり、一ポンドの表わす價值量の減少という點において三つの事柄はたがいに同一なのである。他方、もつばら紙幣の流通している下において、流通必要量の二倍の紙幣が流通に投ぜられるならば、事實上、一ポンドが以前の半分の量の貨幣名となる、一ポンド券が以前の半分の quantity しか代表しえなくなる、ということとは、やはり、一ポンドの表わす價值量が減少するということである。したがつてこれらが、そのかぎりにおいて同一であるとされているわけである。價格の度量標準の事實上の引下げは、その法定的引下げ、金價值の變化、價值尺度として機能する商品の變更とはことなる事柄であるが、それが各紙幣の代表する量の減少というかぎりにおいて、したがつてまた表わす價值量の減少というかぎりにおいて、これらの事柄が生じたのと同じであるとされているのである。

なお『批判』の方で、「變動したものは、價格の度量標準の命名だけであらう」としているのは、ポンドならポンドという貨幣名は變らないとしても、それが呼ぶ金屬重量が變動したにもかかわらず前と同じ名稱が用いられているの

であるから、これはつまりあるものをポンドと呼ぶその命名の變更にほかならない、ということであるのはいうまでもない。「造幣純分」という語をあてたのは——「貨幣の金位」(宮川譯、宇高譯、なお猪俣譯では「鑄貨率」)——Münzfubであつて、その變動というのは要するに價格の度量標準の變動というのと同じことである。

さて、紙幣流通量が流通必要量の二倍となり、ポンドという貨幣名のいい表わす量が事實上半減したさい、抽象的にいえば、諸商品の價值は二倍のポンド名の價格でいい表わされることになる。このことは、ポンドという貨幣名のいい表わす量が法定的に半分に引下げられた場合と同様である。しかし、この物價の二倍の騰貴というのは、同じ貨幣名のいい表わす量の半減ということから、抽象的、法則的にいつてそうなるというのであつて、實際に物價が二倍となるというのではなく、またこの物價騰貴の過程が兩場合とも同じであるというのではない。價格の度量標準の法定的變更ではなく事實上の變更のさいにおける、いいかえれば「直接的」變更ではなく「間接的」變更のさいにおける、物價騰貴の過程は、きわめて特徴的な過程をとるのであるが、かかることはまだここで問題とされてないのであつて、ここでは紙幣が流通必要量をこえて流通に投ぜられると、貨幣名のいい表わす量の減少が生じること、これに基いて物價が反比例的に騰貴することを、明かにしているにとどまるのである。そして『資本論』の叙述のこの段階では、その明示こそ必要にして十分な明示であつて、それ以上のことは、總じてまだ考察さるべき領域に屬さないことなのである。

このことは金の價值變動とそれによる物價騰貴についても同様であり、また價值尺度として機能する商品の變更による物價變動——いわゆる金銀複本位制下の物價變動——についても同様である。したがつてこの段階では、金價值の變動と諸商品價格の變動との關係についても、「諸商品價格は、貨幣價值が元のままであれば諸商品價值が増加す

る場合にのみ、諸商品價值が元のままであれば貨幣價值が減少する場合にのみ、一般的に騰貴しうる」云々というように、「諸商品價格一般の運動に關しては、簡單な相對的價值表現の諸法則が妥當する」(『資本論』第一卷、一〇四頁)。「金の價值變動に關しては、交換價值の法則が妥當する」(『批判』、五四頁)ということを描き出すとか、つぎのように、金の價值變動は價值尺度としての金の機能を妨げるものではないとか、という視角から述べられているにすぎなく、金價值の變動と諸商品價格の變動との關係それ自身について、より立入って明かにするという問題には、まだ入っていないのである。

「金の價值變動は、すべての商品に同時に (gleichzeitig) 影響し、かくして、他の事情にして同一ならば、すべての商品の相互的な相對的諸價值を、——それらはいまやすべて、以前にくらべてより高い、またはより低い、諸々の金價格で表現されるが、——不變のままでおく」(『資本論』同上、一〇四頁、傍點—三宅)。

「一オンスの金の價值が、その生産のために必要な労働時間の變動のために、減少または増加するならば、それは、すべての他の商品にたいして」様に (gleichmäßig) 減少または増加し、したがって以前と同じように、すべての商品にたいして所與の大きさの労働時間を表示する」(『批判』、五五頁、傍點—三宅)。

また同様にしてたとえば、——諸商品の流通にとって必要な貨幣の數量について説明している箇所では、——つぎのように述べている。

「諸商品の價值が不變な場合には、それらの價格は、金(貨幣材料)そのものの價值につれて變動するのであって、それが減少すれば比例的に (verhältnismäßig) 騰貴し、それが増加すれば比例的に下落する」(『資本論』同上、一二二頁、傍點—三宅)。

ここではまた、金の價值變動と價值尺度として機能する商品の變更とを對比して、つぎのように述べている。

「諸商品の價格がまず貨幣の價值に逆比例して變動し、そしてそれから、流通手段の數量が諸商品の價格に正比例して變動する。まったく同じ現象は、たとえば、金の價值が減少しないでも銀が價值尺度としての金にとつて代わる場合、または、銀の價值が増加しないでも金が銀を價值尺度としての機能から驅逐する場合に生じるであろう。……どちらの場合にも、貨幣材料の、すなわち、價值尺度として機能する商品の、價值が變動し、かくして諸商品價值の價格表現が、かくしてこれらの價格の實現に役立つところの流通しつつある貨幣の數量が、變動したであろう」（同上頁、傍點—三宅）。

「同じ變動は、舊價值尺度がそれよりも價值の大きいまたは價值の小さい金屬によつて驅逐された場合にも生じるであろう」（『批判』、九七頁）。

見られるようにここでは、金の價值變動はすべての商品に同時に、一樣に、比例的に、影響を與えると述べられている。しかし、といつて、實際に金の價值變動がすべての商品に同時に、一樣に、比例的に、影響を與えるというところをいつているものではないのである。たとえばつぎの敘述を見られた。

「たとえば、いまもし、價值尺度そのものの價值が減少するならば、そのことはまず第一に、貴金屬の産源地で商品としての貴金屬と直接に交換される諸商品の價格變動において現象する。ブルジョアの社會の發達の不十分な狀態においてはことにそうなのだが、他の諸商品の一大部分は、なお比較的ながい間、價值尺度の、いまでは幻想的となつた舊價值で、評價されるであらう。とはいえ、一方の商品は他方の商品を、それらの相互的な價值關係によつて感化するのであつて、諸商品の金價格または銀價格は、しだいに、それらの價值そのものによつて規定される諸比率において調整され、ついには、すべての商品價值が貨幣金屬の新價值に照應して評價されるにいたる。この調整過程には、直接に貴金屬と交換される諸商品の代價として流入するところの、貴金屬のたえざる増大が伴っている」（『資本論』、同上、一二三頁、傍點—三宅）。

『批判』の方ではまた、ヒュームの數量説を論じているところで、つぎのように述べている。

「……だが實際には、騰貴するのは輸出される諸商品の價格のみである。かくて、價值の下落した金銀ですでに評價されているこれらの商品の價格は、それらの交換價值が引きつづいて金または銀の舊生産費の標準にいたがつて金銀で評價されているところ、その他、すべての商品にくらべて、騰貴する。同一の國における諸商品の交換價值のかかる二通りの評價は、もちろんただ一時的に存しうるのみであつて、これらの金價格または銀價格は、交換價值そのものによつて規定される諸比率において調整されざるをえなく、かくしてついには、すべての商品の交換價值は貨幣材料の新價值に照應して評價されるようになる。かかる過程の展開は、一般に市場價格の動搖の内部において諸商品の交換價值が自己を貫徹する様式と同じように、まだここで取扱う事柄に屬さない。しかし、この調整が、ブルジョアの生産の發達の不十分な時代においては、きわめて徐々に、かつ長期に互つて、行われ、……」（『批判』、一五七—八頁、傍點—三宅）。

「十六世紀および十七世紀においては、物價は貴金屬の増加に伴つて一樣には騰貴しなかつた。諸商品價格になんらかの變化が現われるまでには半世紀以上が経過したし、それからでも、諸商品の交換價值が一般的に金銀の下落した價值にしたがつて評價されるまでには、したがつてこの革命が一般的な諸商品價格を捉えるまでには、さらに長い期間がかかったのである」（同上、一六〇頁）。

すなわち、金價值の變動はすべての商品に同時に、一樣に、比例的に影響を與えるものではなく、すべての商品がこの新價值に照應して評價されるまでには一連の波及的な調整過程（Ausgleichsprozess）が存するのである。そしてこの調整過程の長さは資本制の生産「流通機構の發達の度合によるが、十六、七世紀においてはきわめて長期にわたつたと（註）。ここで、かかる過程の展開は考察のこの段階においてはまだ取扱うべき領域に屬さないとしていること、そしてこの過程の考察が屬さないのは、一般に市場價格の動搖の内部において諸商品の交換價值が自己を貫徹する様式の考察が屬さないと同じであるとしてゐること、つまり價值と市場價格との關係の考察についてと同じであ

るとしていること、このことは銘記さるべきである。

紙幣流通量が流通必要量の二倍となり、同じ貨幣名のいい表わす金量が事實上半減したさい、諸商品の價值は二倍の貨幣名の價格でいい表わされることになる、というのも、かかる意味あいにおいてである。この法則がいかにして自己を貫徹するかということとは、まだここで取扱うべき領域に屬しないとされているわけである。

(註) ちなみに、金の價值は、したがって金貨幣の價值は、すべて、新産金の價值によって決定される。それ以外のものによつて——舊産金の尠大な量とか稀小性、需要とかによつて——決定、左右されるのではない。これについては改めて論ずる。

三

ふたたび遊部氏の著書に戻ろう。

氏はその著のおわりの方に「價值論とインフレ論」なる堂々たる見出しの節を設けられ、飯田繁氏の論文を批判されつつ、はしなくも、氏自身の所説を要約的、結語的に述べておられる。そのところで、「貨幣價值の變化は全體の商品價格に均等に作用する點」について見ると、つぎのようにいわれている。

「この場合の貨幣價值とは金貨に關するかぎり固有内在的のものであらうから、もとよりこのような意味での金價值の變化は、商品價格の上に、一律的な影響を及ぼすであらう。けれども紙幣の場合は異なる」(一九二頁、傍點は原文のまま)。

「ここで價格と呼ばれているもの」は「最も具體的な需給を顧慮せる市場價格を意味」しているのである。氏が自身で打たれた傍點は、そのまま、氏の謬點を示すに役立つことになる。これについてはもはや述べるまでもないであらう。つぎに紙幣の場合はいかに「異なる」といわれるのであらうか。

「けれども紙幣の場合は異なる。……紙幣減價率は平均的には二分の一たるであらう。この場合商品價格總額が一〇億圓に騰貴するにしても、……個々の商品種類についてその騰貴率が一律に二倍であるということは云い得ない。……したがって個々の商品の價格の騰貴が平均的な意味での紙幣減價率を反映するとは原則的には云い得ない。それぞれの商品種類に對する有効需要を形成する紙幣の減價率を反映するのみである」(一九二—三頁、傍點—三宅)。

氏はここで紙幣の減價率には、「平均的な意味での紙幣減價率」と「それぞれの商品種類に對する有効需要を形成する紙幣の」、つまりそれぞれの紙幣のその時その時による、「減價率」とがあるという、注目すべき區別を設けておられるが、そのどちらが正しいということもいえない。というのは、この「平均的」減價率なるものは、所詮、それぞれの紙幣の、その時その時による減價率なるものの平均であらうからである。ところで氏は、「この場合商品價格總額が一〇億圓に騰貴する」といわれる。この一〇億圓とは氏に於ては、さきに註で氏のいう「紙幣必要量」の誤りとともに指摘しておいたように、價值どおりの價格を意味するのであつて、ここでもますます煩雜になるのでこれは問わないとしても、この一〇億圓がここでは「最も具體的な市場價格」の總額とされていることは、したがって二重に、おどろくべきことであるとしなければならぬ。このように、抽象的にいつてのみいえることが氏に於ては「具體的」にいつてそうなると説明されているとともに、逆に、「したがつて個々の商品の價格の騰貴が平均的な意味での紙幣減價率を反映するとは原則的にはいいえない」ということによつて、つまり、抽象的、法則的には指摘されねばならぬことを「具體的」にはそうならぬという理由から否定するということによつて、それは御丁寧に補完されているのである。このように、正しいことはいわぬという氏のモットーをしごく巧みに守り通されているのであるが、つぎの説明ではどうであらうか。

「たとえ貨幣價值は不變であつても價格標準が變更されると諸商品價格は一樣に影響を蒙り物價水準も變動する筈である……序で乍ら、紙幣減價による物價の騰貴の際に價格標準の變更は存しない。この點私見の眼目である。……〔飯田氏は〕紙幣減價と價格標準切下とを相似性においてとらえており、直接的同一性においてとらえていないかの如くであるが、その實氏によつて紙幣減價に基づく商品價格騰貴が、一律的に行われるように考へられている點、結果において價格標準の事實上の切下が豫想されていると思われる」(一九三—四頁、傍點—三宅)。

ここから分ることは、遊部氏が、「價格標準が變更されると」「商品價格騰貴が一律的に行われる」、しかるに「紙幣減價による物價騰貴」はさきのように「個々の商品種類についてその騰貴率は一律に二倍である」ということは云い得ない」、したがつて「紙幣減價による物價騰貴の際に價格標準の變更は存しない」、というきわめて子供らしい三段論法を操つておられるということである。この考え方はここではじめて示されているものであるが、この誤りが前と同じ性質の誤りに基づいていること、かつそれに價格の度量標準の法定的變更と事實上の變更との差別をわきまえておられないことが加つてゐること、はもはや繰返すまでもないであらう。なおこれに、氏の考えておられる「價格標準の變更」がいかなるものであるかを思い合わせるならば——「價格標準は一度制定されたならば便宜の「慣習的」なものとなし惡鑄や平價切下の行われぬかぎり不變である」(前出)——、つまり「惡鑄」のさい(「平價切下」については氏は「平價切下の時は單なる惡鑄の時に比しはるかに複雑な階級的利害關係が反映される差別がある」(七六頁))と宣つてゐるだけであるからいかなるものを指しておられるのか分らない)、「商品價格騰貴が一律的に行われる」といわれているわけであることを思い合わせるならば、右の三段論法の内容はますます奇妙なものとなるであらう。そしてしかも、當の遊部氏が、「惡鑄したからといつて、したがつて價格標準が切下げられたからと

いつてたゞちに物價が騰貴するわけではない」(八頁)といつておられるにおいては、もはやわれわれはこの支離滅裂についてなにごともいい加える要がないであらう(惡癖につけてはのちに述べる)。

遊部氏はつぎのように身振り大きく嘆かれる。

「戦後インフレ論の盛行にもかゝらずその極度の理論的貧困は價値的視點の缺如にある。むろんその他貨幣論や信用論の無智や無理解が算えられるが、ともかく根本的には價値論の視角が定立されていないところに多くの愚劣な議論のうまれ来る根據があるのである」(一八六頁)。

これら「理論的不毛のインフレ諸論」にたいし「價値論の視角」の「定立」を計られたものが氏の所説である。ところがこのように高々と掲げられる氏の所説の内容を見ると、どこから手をつけたらよいか困惑するほどの誤謬の堆積なのである。しかしかかる氏の邪教祖的身振りは、若干輕薄な初歩者にありがちの、内容をもつて評價しえず身振りをもつて評價する傾向と意外に——氏としては思惑どおりに——相呼應し、それらの人々を幻惑させるに十分であるものようである。これが、ある場合にはたんなる放言ではなからうかと思われるような、本來ならば無視されてしかるべき所説をも取り上げた理由の一つであつた。しかし氏の所説を取り上げた理由はただそれだけではない。氏は、通常隱微な形で犯されている多くの、俗流の見解のもるもの誤りを擴大、發展させ、ある場合にはそれによつてそれを質的に變化せしめ、そして私見こそは俗流と絶縁しかつ先人未知の大發見をされたかのごとく揚言されるという獨特な學風を採つておられるのであつて、このようにして、誤謬の蒐集、擴大、發展、顯現化、これらと『資本論』『批判』とのこじつけという、好箇の檢討材料を提供されているからでもある。その意味では、學界にたいする氏の

寄與はきわめて獨特であるばかりでなくかつ大ともいいうるであらうか。

四

木村禧八郎氏はその著『紙幣の運命』（昭和二十四年十一月刊、岩波新書）において、氏が舊著において「物の價值の變化にもとづく物價騰貴を實質的物價騰貴と呼び通貨側（不換紙幣）の價值の變化にもとづく物價騰貴を名目的物價騰貴と呼んだ」ことを、「これは正確ではないのでここに訂正する」とされて、つぎのようにいわれている。

「というのは名目的物價騰貴は貨幣單位の呼稱を變更した場合つまり舊一圓を新百圓と呼ぶような場合の物價騰貴を意味する。この場合は物價、賃金、債權、債務全部の呼稱が變るのであつて、文字通りの名目的な物價騰貴である。しかしインフレーションの場合の物價騰貴は商品價格の騰貴と賃金、債權、債務の騰貴とがいちじろしく不均衡になるところに特徴があり、……これはたんなる名目的な物價騰貴ではない。というのはそれによつて物價、賃金、債權債務の間に實質に重大な變化を招來するからである」（六二頁、傍點—三宅）。

かくて氏は、遊部氏がインフレーションによる物價騰貴を「名目的騰貴」とし、「これ蓋し紙幣減價による物價騰貴は價格標準の切下の場合と同一の事態であるとみらるる所以である」としておられることにたいして、「全くの謬見である」、「實に乱暴な獨斷である」とされ——この木村氏の言葉には同感であるが——、つぎのようにいわれる。

「インフレによる名目的物價騰貴が價格標準の切下と同一であると看做すのは根本的に間違っている。價格標準の切下の場合には商品價格でも賃金でも公債、社債、預金などの債權債務でもみんな呼稱が變り、みんな名目的に騰貴するけれどもインフレによる名目的物價騰貴は、商品價格の騰貴と契約にもとづく價格（賃金、債權債務）の騰貴とに差異があるというところに重大な問題が伏在しているのである。この點を見逃してインフレがデフレーションと同じであると斷ずるならば、……」（六四

頁、傍點—三宅。

まず氣がつくことは、木村氏が「債權債務」も「騰貴」するような場合の物價騰貴こそが「名目的物價騰貴」であるとされていることである。これはつまり、「物價」騰貴のなかに「債權債務」の「騰貴」を數えておられることになるであろう。これは言葉の使い方としてもおよそ無理ではなからうか。つぎに氣のつくことは、「價格標準の切下」という語を、いわゆる「デノミネーション」という語の同意語と解されておられるということである（註）。

（註） 本稿で引用した遊部氏の文中にすでにいくたびとなく見うけられたように、「物價の名目的騰貴」という言葉を遊部氏はきわめて愛好され、多くのことをこの言葉を用いることによって片附け去っておられるのであるが、なにももって名目的騰貴とされているかは、はっきりしていないようである。すなわち遊部氏は、「名目的物價騰貴」の「名目的」という語の意味は、「價值關係の變動にもとずかず、價值關係を不變としても生ずるところの騰貴」（六頁）であり、「商品價值及び金價值總じて價值關係と無縁であるという意味である」（一一頁）とされている。したがって氏は、「たとえ商品價值も金價值も不變だとしても、……商品價值以上に騰貴しうる」ところの「市場價格」の場合の説明に窮してしまわれる。そしてそれを、「これは價值關係に直接に基礎をおく價格騰貴ではないが、結局長い眼でみればかゝる價格の變動は價值關係に根據づけられる」（六頁）とされ、商品價值および金價值の變動による物價騰貴とともに「實質的騰貴」とされるのであるが、しかし前二者とは「少々意味が異なる」とつけ加えざるをえないことになる。とともに他方で、「價格標準の變動に基く價格の變動は純粹に名目的であつて、商品價值、金價值總じて價值關係と無縁であるが、また同じ名目的であつても需給の變動による市場價格の變動とも區別されねばならぬ」（一九三頁、傍點—三宅）とされる。すなわち、需給の變動による市場價格の場合は、「少々意味が異なる」「實質的騰貴」であり、「純粹に名目的」變動と「區別されねばならぬ」「名目的」變動、ということになるのであつて、「實質的」と「名目的」との區別ははなだあいまいなものとなつてしまつていたのである。なお當面の點について氏の見解を繰返し引いておくと、——兩者「紙幣減價による物價騰貴と價格標準の切下による物價騰貴」とも價值關係の變動に基かぬ純粹に名目的

な物價の騰貴である」(六八頁、傍點—三宅)。

また、木村氏がここで、「名目的物價騰貴」、「文字通りの名目的な物價騰貴」、「たんなる名目的な物價騰貴ではない」といわれている「名目的」の意味も、かならずしも明確ではないようである。

なお木村氏は、ここで氏が引用されている遊部氏の文中で遊部氏によって引用されている『資本論』の文章について、「マルクスは紙幣減價と商品價格との關係を説明しているものであり、その限りにおいて誤りはないが」(六四頁)といつておられるが、これは木村氏の速断と遊部氏のいわばペテンとが結びついたわけであつて、こゝは(第一卷、一六八頁)、剩餘價值の形成の説明を商品の價值以上の販賣から導き出すとする俗説にたいして、販賣者は購買者になる、相互にかかることが行われるならばかれらは諸商品を價值どおりに販賣したのと全然同じではないか、萬事はやはりものままである、と批判しているところであつて、遊部氏のように「紙幣減價による物價騰貴」の性質を説明するために引き合ひに出すにはいささか妥當でない箇所であるとともに、木村氏のいわれるように直接こゝで「紙幣減價と商品價格との關係」を説明しているものでもとよりないのである。

木村氏がいわんとされるところは、インフレーションのさいには債權債務はそれが發生したときと支拂決済が行われるときとは同じ一萬圓でも一萬圓の價值が下つてゐる、他方諸商品の價格はかつては一萬圓であつたものが二萬圓になつてゐる、兩者をくらべるとそこに大きな「不均衡」がある、ここに「重大な問題」があるのだ、ということであろう。もとよりこれが「重大な問題」であることは木村氏のいわれるとおりであるが、しかしなぜかかる「不均衡」が起きるかという点、それは圓の價值、つまり圓のいい表わす金量が減少したためである。

紙幣減價についての特約のない通常の債權債務においては、債務者はたとえ一萬圓を一年後に支拂うという債務を負い債權者は一年後に一萬圓の支拂ひを受けるという債權を持つのであつて、——利率は圓の減價を見越して昂

騰することはありうるところであるが、これはいまは一應度外視して差支えない——、その一年間にいかに圓が減價しても、債權債務額が一萬圓ということには變りはない。木村氏はインフレーションの場合債權債務の「騰貴」と商品價格の騰貴とが「不均衡」であるとされるが、債權債務はこのようにすこしも「騰貴」しないのである。その舉げられる公債、社債、預金のうち、公社債は證券相場が立つが、かかる確定利付債券の相場は、他の事情を別とすれば利子率の動きにしたがつて騰落するのであつて、その騰落は商品價格の騰落と同じ運動法則によるものではない、加うるにインフレーションのさいは他の事情を別とすれば利子率は昂騰するからおそらくこれら債券の相場は額面金額より低落するであらう。しかしいすれにしても、期日における政府、會社の支拂いは額面金額どおりなされるのであつて、この額面金額が、つまり債權債務自身は「騰貴」も低落もすることはない。このようなことは木村氏は萬々御承知のはずであるが、要するにそれならば、債權債務の「騰貴」ということをここでいわれるべきではないのである。このように、インフレーションの場合債權債務はすこしも「騰貴」しないが、諸商品價格の騰貴との間に「不均衡」が存するのは、圓の價值が減少したためである。ところが、木村氏はつぎのようにいわれる。

「インフレーションが價值關係に重大な影響をおよぼす根本の原因はインフレーションにもとづく紙幣價值の減價が商品價格と契約による債權價格とに同時にかつ平等に反映されないというところにある」（八二頁、傍點は原文まま）。

「……契約に基づく資金その他の債權價格は同時にかつ同率に騰貴しない。このことは貨幣の機能のうちの流通手段と決済手段（支拂手段）とがインフレーションを通じて分裂することを意味する。商品賣買に用いられる通貨は流通手段としての機能を営むのであるが、インフレーションによってこの流通手段としての通貨の價值は減價する。つまり商品を賣買するときの通貨は減價する。しかるに賃金（一種の債權）を支拂つたり預金を拂戻したり、社債國債を償還したり、長期の借入金返済したりする

場合の通貨は、商品賣買のときに減價すると同時にまた同率に減價しないのである。……同じ通貨でありながら、その用途によつて價值が異なる」(八六―七頁、傍點―三宅)。

「貨幣の流通手段としての價值と支拂手段としての價值とが分裂する」(八八頁)。

まず、文意をとるのに差障りになる一つの混乱があるようである。すなわち、「紙幣價值の減價が平等に反映されない」というのと、債務を支拂う「場合の通貨は商品賣買のときに減價すると同率に減價しない」というのとは、「反映」という字があるなしの相違であるが、そのために二つの句はまったく別のことをいっておられることになる。前の句によれば、商品價格と「債權價格」とが同率に騰貴しないのは紙幣價值の減價が平等に反映されないから、後の句によれば、同率に騰貴しないのは紙幣價值の減價が同率でないから、というのであつて、つまり、前の句では減價は同率、それが平等に反映されない、後の句では減價は同率でない、といわれていることになるのである(註)。

(註) この混乱はさきの遊部氏の文章を想起せしめるであろう。すなわち氏はいわれる。「金價值の變化は、商品價格の上に一律的な影響を及ぼすであろう。けれども紙幣の場合は異なる。……個々の商品の價格の騰貴が平均的な意味での紙幣減價率を反映するとは原則的には云い得ない。それぞれの商品種類に對する有効需要を形成する紙幣の減價率を反映するのみである」(前出、傍點―三宅)。誤謬があまりに多く重り合つていて、さきにはこの點も指摘するとますます煩雜さが加わるので、わざと觸れないでおいたのであるが、すなわちこども、影響、反映の仕方が一律的であるか、ないかということ、影響、反映するもの自身の變化——貨幣の價值の減價が一律的であるか、ないかということが、混同されているのである。

かかる混亂を犯されるのは、もし誤謬が論理的に一貫しているならば、貨幣の價值と貨幣の相對的價值との混同に基ずくものである。

この混亂を明確につかんだのちにおいては、木村氏のいわんとされることはそのどちらでもあると解してもよい

であろう。けれど木村氏のこの混亂はたんなる表現の混亂ではなく、事態把握の混亂であるからである。さて木村氏によれば、債權債務と諸商品價格との間に「不均衡」が存するのは、圓の價值が減少したためではなくて、「同じ通貨でありながらその使途によつて價值が異なる」ためであり、「同時にまた同率に減價しない」ためである、と（註）。氏によれば商品價格の方が「騰貴」するようであるから、そうすると商品賣買のときには通貨の減價率はより大であり、借入金を返済するような場合には減價率はそれより小であるといわれていることになる。だがそうであるとするれば、減價率のすくない通貨をもつて返済を受けた債權者としてはなにも「不均衡」をいうことがないであろうし——ないであろうが、債務者はそうした通貨を採り出すために非常な骨折りをして、結局採り當てえないであろう、ということはいうまでもない。商品價格が騰貴しているのに返済金額が一年前と同じ名目額の一萬圓であることが、債權者にとつて不利であり、債務者にとつて有利であるのは、一萬圓のいい表わしている實質が小さくなつたため、つまりまさにこの一萬圓についても圓の價值が同率に減價しているため、にほかならないのである。

（註）この點についても遊部氏と同様である。すなわち遊部氏もいわれる、「それぞれの商品種類に對する有效需要を形成する紙幣の減價率」（前出）と。

また、紙幣價值の減價率は同じであるが平等に反映されないために、商品價格と債權債務との間に「不均衡」が生じるというのであれば、これもまた妙である。たとえばある商品價格が二倍に騰貴したさいには、その商品取引から發生した債權債務額はやはり二倍の大きさとなるであろう。その債權債務額は商品價格額以外のものではありえなく、紙幣價值の減價が兩者に「同時にかつ平等に反映されない」ということはありえないのである。また公社債等や預金であれば、やはりその時の減價した圓で拂込まれ、預け入れられているのであつて、商品價格とこれらとの間に圓の

減價率が不平等に反映されていると見られるいわれはないであらう。

要するに、インフレーションのさう一方において物價が騰貴しているにもかかわらず、他方において債權債務がその名目額で支拂決済されるために、債權債務が長期であればあるほど、またインフレーションの進行度がはげしければはげしいほど、兩者の間に大きな「不均衡」が生じるが、なぜかかる「不均衡」が生じるかという点、木村氏のいわれることは正當ではないばかりでなく、かえつて木村氏の所説の否定の上に立つてはじめてかかる「不均衡」を説明しうるのである。

つぎに、木村氏が「價格標準の切下」を「デノミネーション」と同意語に解しておられる點について見よう（註）。

（註）デノミネーション、denomination. 命名とか名稱とかという語。ちなみに、『資本論』では第一卷、一三三頁の有名な箇所で、「だが、たとえ紙幣がその限度を、すなわち流通したはずの同じ名稱（Denomination）の金鑄貨の量を、超過しても、……」と用いている。もちろんたんに Name 名前というだけの意味である。ところが近頃普通には、貨幣名——長谷部氏譯語彙によれば貨幣稱呼——の變更の意に用いられているようである。そして多くは、名稱だけでなく一〇〇を一とするというように單位の切下げを含めた意に、すなわち、いまここで木村氏のいわれるような「舊一圓を新百圓と呼ぶような場合」にはなくその逆の場合に、つまり木村氏自身が別の箇所で「デノミネーション（通貨の呼稱單位の切下）」（一〇四頁、傍點—三宅）とされているようなことを含めた意に、用いられているようである。

木村氏は「デノミネーション」の特徴としてつぎのようにいわれる。

「デノミネーションの特徴は通貨單位の切下を一切の債權債務にも適用するところにある」（一〇六頁、傍點—三宅）。

既述のように、「價格標準の切下」には法定的な引下げと、同じ貨幣名のいい表わす量が減少するという意味で事實上の引下げというものとがあるが、木村氏がここでもいわれているのは、インフレーションと對比していわれ

ているのであるから、もちろん法定的な引下げを指しておられるわけである。つまり金七五〇ミリグラムをもつて圓と稱するという規定が金七・五ミリグラムをもつて圓と稱するというように變更された場合である。ところが「デノミネーション」はたんに貨幣名の變更であつて、價格の度量標準にかんする規定がそこで規定される場合もあるし、——「呼稱單位の切下」のさいには價格の度量標準が引上げられることになる——、また規定されない、規定しえない場合もあるであらう。またもし「デノミネーション」の特徴が貨幣名の變更——單位の切下げを含めて——を、「一切の債權債務にも適用する」というのであれば、これは、價格の度量標準にかんする規定がそこで規定された場合にも、價格の度量標準にかんして規定するだけでなくそれをすべて貨幣名で表示されているものに適用するという注意書がそれに加わつたものであることになるであらう。つまり、同意語とはいえないのである。

價格の度量標準が法定的に引下げられたときに實際に、木村氏が當然のこととしていわれるように「商品價格でも債權債務でもみんな呼稱が變り、みんな名目的に騰貴する」かどうか、ということにたいする解答の示唆は、實に木村氏自身によつて與えられているのである。すなわち氏はその三頁あとでつぎのようにいわれている。

「昔鑄貨の改鑄と稱して金貨に含まれる金純分量を減らして大名の財政不足を救うという手段がとられたが、鑄貨を改鑄して金貨の含有金量を減らしてもけつきよくは、それだけ物價が名目的に騰貴して……。ただその間大名は十萬兩という舊債務をもっている場合、同じ兩という貨幣名でも、その一兩の中に含まれている金量が減らされた新兩金貨で、舊債務を返済できるから、それによつて財政の不足を救うことができ、かくて鑄貨の改鑄という手段をしばしば用いたのである」(六七頁、傍點—三宅)。

また木村氏は、「價格標準の切下」を「デノミネーション」とし、後者を、——したがつて前者をも、ということになる——、「デヴァリュエーション」と區別しておられるのであるが、——氏は氏のいわれる「通貨改革」の第一

として「デノミネーション」を、第二として「デヴァリュエーション」を挙げられる——氏は「デヴァリュエーション」をつぎのようにいわれる。

「デヴァリュエーションの目的は、……對外貿易を不利にならないようにあるいは有利に導くように國內通貨の金平價（貨幣單位）基本的な貨幣名というほどの意であろう」一圓の代表する純金分量を、切下げる點にある」（一〇七頁、傍點および「内——三宅」）。

この文章が示しているかぎりにおいては（註）、これは「價格標準の切下」にほかならぬであろう。とすれば氏は、なぜこれをデノミネーションと區別しなければならなかつたかについて、振りかえられるべきであつたのである。

（註）ところが氏の舉げておられる具體的な例は、九四八年一月のフランス・フランの八〇%の「平價切下」の場合であつて、これはフランスのフランがいい表わす純金分量の引下げとは、つまり價格の度量標準の法定的引下げとは、ただちにはいいえなものである（デヴァリュエーションについては續稿を見られたい、なお本誌前號、拙稿一二三頁参照）。ところが——三轉して——、木村氏自身はかかる「平價切下」、かかる「平價」を價格の度量標準の法定的引下げ、決定とされているのである。すなわち、「日本の場合は、……一應外國通貨との交換比率がドル三六〇圓に決められたので、これにもとづいて通貨の金表示量、貨幣法によつて決められれば新平價が設定されることになる」（同頁、傍點——三宅）と。これは前號拙稿において見た鈴木武雄氏の誤謬と同じものである。なお念のため申し添えれば、本來の意味に、おける、デヴァリュエーションとは價格の度量標準の法定的引下げにほかならない。

しかしまた、價格の度量標準の法定的引下げの場合に純分の下つた貨幣で舊債務を返済するにあつて、舊債務の名目額と同じ名目額を支拂えばよいときまつているわけでも、かならずしもないであろう。これたとえば、十七世紀末葉、ウィリアム三世當時、銀鑄貨の磨滅、盜削による混亂を解決するため改鑄を行ったさい、大藏省の役人ロウ

ンズと新興ブルジョアジーを代表したロックとの間に論争が行われた所以であり、十九世紀初葉、イングランド銀行が兌換停止後それを再開したさい、アットウッドがロウンズの再現として改めて主張しなければならなかつた所以である。ロウンズ對ロックの論争が實際上目的としたところは、ロウンズは、國債は軽いシリリングで契約されていたのに重いシリリングで返済さるべきであらうかとして、借入れた銀が名目上は五オンスであつても實際にはただ四オンスであつた場合には、四オンスを返済すればよいというかわりに、名目上は五オンスを返済せよ、だがその金屬實體を四オンスに減少させ、從來五分の四シリリングと呼ばれていたものを一シリリングと呼ぶことにせよといい、これにたいしてロックは、實質上も五オンスを返済せよとしたことであつた。そしてこの論争においてロックが勝利をえた——『批判』、『貨幣の度量單位にかんする諸學說』参照。この場合は、債務者は軽い貨幣で借りたのであるから重い貨幣で返済する必要はないとしたのであり、そして結局、債權者は軽い貨幣で貸して同じ名目額の重い貨幣で返済を受けることとなつたのであつて、重い貨幣つまり含有金量の大きい貨幣で借りて、軽い貨幣で同じ名目額を返済するという場合ではないが(註)、名目額と金屬實體との關係について、舊債務は名目額だけを支拂えば足るとかならずしもきまつてゐるといふものではない、ことを物語つてゐるものである。

(註) このような兩者の差異の社會經濟的内容については、惡鑄を論ずるさい觸れるであらう。

だがまた、「デノミネーション」のさいも、債權債務が「みんな名目的に騰貴する」ときまつてゐるわけでは、かならずしもないのであるからうか。木村氏自身に語つてもらおう。氏は「デノミネーション」の具體的な例として一九二一——二二年のソヴィエトの場合の舊紙幣百萬ルーブル⇨新紙幣一ルーブルを挙げられ、つぎのようにいわれる。「そして舊紙幣ルーブルをもつて表わされた一切の債權債務上の勘定をもこれに準ぜしめる」とした。……その結果として

物價、賃金、債權債務の關係は従前通りである」(一〇六頁、傍點—三宅)。

この「準ぜしめる」といわれていることのなかにすでに、債權債務にたいして同率で準ぜしめられない場合がありうることを示されているのではなからうか。「關係は従前通り」と強調される氏自身が、一九四八年六月の西ドイツの「通貨改革」についてつぎのように述べておられるのである。

「……ドイツマルクなる新通貨を發行し、あらゆる現存の金銭債權及債務を一〇ライヒスマルク對一ドイツマルクの比率をもつて切下げる……この切下げは一切の通貨、銀行預金、擔保附その他の公私債務に影響を及ぼすが、國債乃至社會保險金及び同様の年金には適用されない。……物價、賃金、俸給、地代及び税金は新通貨の場合に於ても舊通貨と同様である」(一三六頁、傍點—三宅)。

木村氏はこのような場合を、氏のいわれる「通貨改革」の第三、「國內通用價值の切下」——「過剩購買力を切捨てる」こと——とされるようであるが、デノミネーションは「〇がいくつもつくようでは計算上不便であるので、この不便を除く」(一〇五頁) という目的をもつばかりではなく、それとともに、舊貨幣名で表現されている各種のものの名目額の調整を行うためにもなされるのが、むしろ普通ではなからうか。右の一〇ライヒスマルク——一ドイツマルクのさいにも、たとえば一〇萬ライヒスマルクの預金は一萬ドイツマルクとなるが、一〇萬ライヒスマルクの商品、賃金は一〇萬ドイツマルクとされているのであり、ライヒスマルクがドイツマルクとなつた點はもちろん同じであるが、いかなる比率で書換えられるかは同一でなかつたわけである。資本金や企業資産、株式や社債の評価をどうするか、締結乃至取得時期の古い債權債務と新しいそれとをどう考慮するか等々の問題もあるのであつて——たとえば前大戰後のドイツの金マルク評價法——、かならずしもデノミネーションのさいにはすべてが一律ときまつてゐるとは

いいえないのである。もつとも「準ぜしめる」場合をのみ「デノミネーション」と呼ぶと限定して用いれば別であるが、要するにこの場合、「準ぜしめる」、しめない、は一應いかにようにでも定めうるることなのであるから、法的にかくかくなるとはいえなく、その時々の実際によつていうほかないのである。

つぎに移ろう。このように、インフレーションの場合の「物價騰貴」は債權債務が「騰貴」しない點で「價格標準の切下」の場合の「物價騰貴」と區別すべきであるとされる木村氏は、遊部氏が「紙幣減價による物價騰貴は價格標準の切下の場合と同一の事態であるとみらるる」といわれているのを「全くの謬見」「實に亂暴な獨斷」「根本的に間違つてゐる」とされたが、木村氏自身の所説の方もまったく正當ではなかつたことになる。ところが木村氏は餘勢をかつて、『資本論』をつぎのように解される。すなわち、すでにいく度も舉げたところの、流通必要金量の二倍の紙幣が流通に投ぜられると事實上一ポンドが以前の半分の金量の貨幣名となる、その効果はあたかも金が價格の尺度としての機能において變更されたのと同じである、かくて以前には一ポンドの價格で表現せられた同じ諸價值がいまや二ポンドの價格で表現される、と説明してゐる箇所をその前後とともに、「マルクスは次のやうに判りやすく説明している」とされて、引用され、つぎのやうにいわれる。

「これが紙幣インフレーションであり紙幣の流通法則である。しかしながら、これは、流通商品と流通紙幣との關係である。インフレーションがたんにこれだけのことであつたならば商品の價格は名目的に騰貴するだけで、貨幣の單位が變更された場合と同様であり、とり立てて問題とするには當らない。」（八一頁、傍點—三宅）。

「マルクスは紙幣減價と商品價格との關係を説明してゐるのであり、その限りに於いて誤りはないが、この説明から現實のインフレーションと貨幣單位の變更と同一事態であると看做するのは當らない。尤もこの點について遊部氏にお會ひした際に質問し

たところ、紙幣減價による物價騰貴は價格標準の切下の場合と同一の事態とみらるる——ということとは商品價格についての、金、貨金については別に……論及していると辯明された。それならば紙幣減價による物價騰貴はすなわちインフレーションと價格標準の切下の場合とは同一の事態とみらるる——という解釋は修正さるべきである」(六四—五頁、傍點—三宅)。

木村氏がここでの「説明」を「流通商品と流通紙幣との關係」、「紙幣減價と商品價格との關係」に限定して解せんとされ、また「現實のインフレーション」についてのものではないとされるのは、すでに見たところから明かなように、債權債務には妥當しないと考へておられるからである。その理由が、この「説明」をもつてしては債權債務を説明しえない、「同一事態」というのは債權債務には當てはまらない、債權債務は氏がデノミネーションと誤解しておられる「價格標準の切下」のさいのように「騰貴」しないということであること、そしてそれらがいかに間違つてゐるかということはすでに述べたとおりである。すなわち、インフレーションによつて債權債務が蒙る變化は、まさにここで明かにしてゐるところの一定の貨幣名のいい表わす金量が減少することのためにほかならないのである、債權債務はなんら例外をなすものではなく、例外たりえないからこそ債權者に不利、債務者に有利といったことも生じるのである。またデノミネーションのさいには舊百萬圓の舊債はたとへば新一億圓と改訂されうるにたいし、インフレーションのさいには百萬圓のままであるが、デノミネーションは價格の度量標準の法定的引下げと同意語ではないし、またこの「説明」は債權債務の「騰貴」が「同一事態」であるとかないとか——いひかえれば「商品價格」に限定して解するとか解しないとかというものではない、ぜんぜんない。これらのことは繰返すまでもないであらう。

ところで氏の誤解は幾重にも重り合つておられるようである。氏はここで「流通商品と流通紙幣との關係」が説明されているものと解され、「その限りにあつて誤りはないが」といわれているが、ここで説明してゐるのは「關係」

という語を用いれば、紙幣とそれが代表する金量との關係、一定の貨幣名とそれがいい表わす金量との關係なのであり、——あたかも價格の度量標準の法定的引下げと同じとしてゐるのはこの點であることはすでに詳述——、そしてそこからなげ諸商品の價格が騰貴するか、騰貴せざるをえないかが説明されてゐるのであつて、直接に商品と紙幣とをぶつけていない點こそが重要なのである。また木村氏は、物價騰貴には債權債務の「騰貴」も入るべきだが、それが兩場合同一には「騰貴」しない、したがつて債權債務はそこから除外さるべきであり、商品價格についての説明してゐるものと解すべき、とされてゐるわけであるが、物價騰貴のなかに債權債務を入れて解されるのが奇妙であり、またこのようにして除外するのが誤りであるばかりでなく、このようにして商品價格について妥當せしめられることも誤つてゐる。つまり、「現實のインフレーション」を問題とされる木村氏は、『資本論』のこの説明をもつて、現實の紙幣減價乃至インフレーションにおける物價騰貴の様相を説明したものではないと解されずに、「現實のインフレーション」のさいの諸商品價格の騰貴を「貨幣の單位が變更された場合と同様であり」「その限りにおいて誤りはない」とされてゐるのである。ところで、これはまさに氏がそこで引用し批判せんとされてゐる遊部氏の文章と同じことをいわれているものである。木村氏のいわれる「貨幣の單位の變更」は「デノミネーション」のことであるから、正確にいえばその點は遊部氏を凌いでおられる。したがつて木村氏は、みずからの説にたいしてみずから、「全くの謬見」「實に亂暴な獨斷」と非難されるという奇妙な勞をとられたことになる。

つぎに移ろう。以上のように木村氏が多くの誤りを、物ともせず犯された實際上の目的の一つは、「なぜ賃金が物價騰貴に追いつかないかを理論的に十分究明」(九一頁)されることにあつたのである。インフレーション下、商品價格は——デノミネーションのさいと同様に——一律に騰貴する、勞賃は商品價格と同率では騰貴しない、しかる

に勞賃は勞働力という商品の價格である、——かかる矛盾に追い込まれた氏にとって、この矛盾を「理論的」にいか
に解決すべきかに迫られたのは、まことに根據のあることである。しかも氏によれば、「勞働力が價值以下に賣られ
ることによつてインフレ利潤（超過利潤）が生れて来る」（八三頁）においては、なおさらそれは、なされねばならぬ
ことであつたのである。

氏にとつて脱出路は一つしかなかった。それは勞賃を商品價格と區別するために、債權債務に組入れることであつ
た。かくて「契約にもとづく價格（賃金、債權債務）」なるものを考案され、いわく、「商品價格の騰貴と契約にも
とづく價格の騰貴とに差異があるというところに重大な問題が伏在している」（前出）、「紙幣價值の減價」は「商品價
格と契約による債權價格とに同時にかつ平等に反映されない」（前出）と。さきの「矛盾」は解決された、と氏は思わ
れたのである。しかも、インフレーションを通じて「資本の蓄積」が行われる二つの方法——「勞働力が價值以下に
賣られること」、「債務を價值以下で返済すること」（八五頁）——がともにここから説明できる！ その上、商品價格
と賃金を入れた債權價格とへの區別づけは、「流通手段としての價值と支拂手段としての價值」との「分裂」をいう
のにも恰好である、そしてこの「分裂」が「インフレ利潤あるいは超過利潤發生の根源」（八七頁）である、——氏の
「理論」は進んで行く、しかし右のことから當然に、勞賃の問題はすでになくなってしまつてゐるのである。すなわ
ち氏はつぎのようにいわれる。

「勞働賃金は勞働力という商品の價格ではあるが、他の商品とは異つて勞働力の販賣と同時に支拂われないで、勞働力を支拂
つたあとにおいて、契約した當時の價格によつて支拂われる一種の債權である。……このように勞働賃金は利子のつかない信用
貸である（註）。この賃金が遅配になつたり不拂になつたりすることによつて勞働者は二重に金利に相當する部分を搾取される

こととなり、さらにインフレーション期においては賃金が支拂われるまでに繼續的に減價した紙幣をもって契約當時の賃金額がなんらの補償も行われることなしに支拂われる。このように紙幣減價によって労働力という商品の價格とその他の商品價格とのあいだに時間的に差異が生れて來ることから、労働力は價值以下に賣られるということになる。……インフレーションによって労働階級の生活が窮乏するのは、このためである」(八二—三頁、傍點—三宅)。

氏の「理論的究明」の末路はあまりにも物悲しい。かんたんにしるそう。つまり氏は、労働力の販賣と支拂いとの間の紙幣減價とその間の金利とが、インフレーションによる労働者階級からの搾取であると述べておられるのである。これによれば、労働力の賣手が販賣と同時に勞賃を受取るならば、たとえば給料日が月初になり、期間が短く日拂、日傭にでもなれば、問題は解消してしまうことになる。「窮乏化」も「インフレ利潤」も消えてなくなる。だがことは、労働力の價格自體がここでは問題なのではなからうか。

(註) 木村氏はここで、「マルクスは労働賃金を信用貸(債權)であると規定している」とされて、『資本論』第一卷一八二頁の箇所を引用されている。たしかにそこでは、労働力はたとえば各週の終りにはじめて支拂われる、ということについて書いている。しかしいまの問題を扱うさいには、そのすぐあとで書いているように、「とはいえ、關係を純粹に理解するためには、労働力の所有者はその販賣と同時に何時でも直ちに約定の價格を受取るものと、しばらく前提するのが便宜である」のである。

木村氏はその「理論的」考察のはじめにおいていわれる、「ものごとを正しく根本的に理解するためにはその第一歩が大切であるといわれる。その第一歩を誤ると、ますます深い迷路にふみ込み永久にそれから脱出することができなくなり魔術のとりこになってしまう」(三七—八頁)と。そして木村氏はそのことを身をもつて示されたわけである。